

育児に関する経験・知識と育児不安との関連

—女子大学生の出産・育児意識に着目して—

○原麻維*・井下紀子**

(*岡山大学大学院社会文化科学研究科・**ノートルダム清心女子大学人間生活学部)

問題と目的

近年では育児不安を抱える母親が多く、要因として母親自身の育児に関する経験の有無が影響している。中谷ら(2005)は、母親になる前に得た乳幼児と接する経験や知識が少ない母親ほど育児関連ストレスが高いと述べている。また、児童虐待の増加が問題となっており、河野(2011)によると、虐待の要因の1つに育児不安がある。育児不安はストレスを高め、虐待の増加などの様々な問題を引き起こす可能性がある。そこで、女子大学生の出産・育児に関する意識や不安内容を明らかにし、妊娠前のサポートを探る手掛かりにすること、さらに、大学で子どもに関する学びを専攻する学生とその他の学生を比較し、育児不安への影響の違いや母親になるまでの知識や経験の重要性について明らかにすることを目的とする。

方法

女子大学生 189 名を対象に、2020 年 11 月上旬にウェブ上の回答フォームを配布し調査を実施した。全て無記名で行われ、回答者は回答したくなければ途中で止められること、アンケートの記入をもって調査への承諾をすることを事前に教示した。調査内容は、対象者の属性、9 タイプの生き方の中から希望するものへの回答を求めた。また、中谷・山本(2005)の尺度を参考にした女子大学生の育児経験・知識尺度(15 項目)、坂本・古橋(2006)の尺度を参考にした出産・育児意識尺度(42 項目)を使用し、それぞれ 5 件法で回答を求めた。経済的支援や福祉などの支援サービスについては、選択肢と自由記述で回答を求めた。

結果と考察

将来の生き方について、継続就業や育児に専念した後、再就職を望む者の割合が全体の約 70%を占めていた。また、出産・育児支援サービスでは、経済的支援を最も多く望んでいた。

学科と知識・経験が出産・育児意識に及ぼす影響について分散分析を行った。その結果、出産・育児意識(合計)と育児不安($F(1,185)=19.885, p<.01$)、育児疲労と不満($F(1,185)=4.314, p<.01$)、社会的な不安($F(1,185)=10.208, p<.005$)、衛生面での

不安($F(1,185)=9.615, p<.005$)において知識・経験の主効果が認められ、子ども至上感($F(1,185)=6.495, p<.05$)のみ学科の主効果が見られた。育児肯定感に関しては、有意な差が見られず、全項目において交互作用は見られなかった。これより出産・育児意識には、知識や経験の有無が関連していた。そのため、日常的に子ども達と関わる機会を設け、知識や経験を積むことが育児不安などの低下に繋がると考えられる。特に、子ども達と実際に関わることで、出産・育児などの過程を疑似体験でき、自分の子育てをイメージする、母親になることや子どもの存在などを肯定的に捉えられるといった心理的变化が起こりうる。また、出産後も就労継続を希望する女子大学生が多く、育児休暇制度の普及などに対する社会的な不安を感じていることが分かった。こうした制度などは徐々に広まっているように思われるが、さらに継続して仕事と育児を両立できる環境を整え、不安や悩みに寄り添う必要があると考えられる。

今回の研究では、子どもに関する知識・経験の具体的な内容まで詳しく調査できなかったこと、学年や家族構成、被験者自身の性格などの比較を行わなかったことが今後の課題であろう。また、大学生になったばかりの1年生と社会人を目前に控える4年生では、結婚や妊娠・出産による価値観が異なる可能性があるため、それらの影響についても今後検討していきたい。

参考文献

河野順子 2011 母親が抱える育児不安に関する要因 —子どもの育てにくさ、母親の認知様式、父親の育児参加をめぐる— 東海学園大学研究紀要, 16, 55-64

謝辞

調査の実施にあたり、貴重なお時間を割いてご協力くださった大学生の皆様にご心から感謝いたします。また、統計処理のご指導をしてくださったノートルダム清心女子大学児童学科名誉教授石原金由先生にご心から感謝いたします。